

様式1〔申し合わせ事項〕 【委員会、全協：共通様式】

令和7年7月4日

東員町議会 議長

南部 豊 様

東員町議会

山田由紀子 ㊟

研 修 報 告 書

研修期間	令和7年7月2日(水) ～ 7月3日(木)【2日間】
研修(視察)先	福井県おおい町 石川県津幡町
目的(テーマ等)	議会改革通年議会について 能登半島地震における町と議会の対応について
資料添付の有無	有 ・ 無

※ 研修概要、内容、所感などは、次ページに記入すること。

## 様式1〔申し合わせ事項〕：【委員会、全協：共通様式】

〔氏名：山田由紀子 〕

研修概要、内容、所感

おおい町 原田議長 堤副議長 細川議運委員長 尾谷総務常任委員長  
田中事務局局長 その他職員方

内容：おおい町の議会改革 住民に信頼される議会として

上記の研修を受講。

所感：福井県は観光を通して、個人的には近しい地域の感覚を持ちながらの研修に臨んだ。福井県内に在住する友人も、「原発の町」や、京都に隣接する位置で、観光資源の多い福井県とはまた違う顔を強く打ちだしていた。

原発関連収入が61%を超える歳入によって、地域住民の行政サービスは充実している状況と捉えるが、一方で、「議会費」の増額にも取り組んでいる。

DXは、令和元年から取り組まれ、タブレットの仕様も直後にコロナ感染対策が急務となり、「オンライン委員会会議」の開催を可能とし、令和4年には通年議会の導入を行い、議員定数の削減と報酬改定を進めている。

「オンライン会議」等については、東員町はコロナ禍においても「介護保険認定調査」「サービス担当者会議」「各種会議」等の開催にあたり、協力体制どころか、検討課題にもならず、拒否的な発言が続いたことで、コロナ感染予防対策がマスクであった介護事業所には、非常にしこりが残る状況は、いまだに見え隠れする。個人的には、議員用タブレットの使用について、幾度となく、ペーパーレスに移行したとはいえ、委員会等での、「説明不足」が否めず非常に苦慮することになっており、これらの改善には「説明責任と報告義務」の2点から東員町に対して改善を求めたいところである。

「通年議会」の賛否については、議員個人の活動の状況によるとしているため、現状であれば、個人としては何らこだわる点はない。しかしながら、「東員町民」の議員に対する評価には厳しいご意見や、解釈が多く存在する状況を認識しており、「住民の意見」の聞き取りが、いまだ不十分である状況では、「通年議会」との看板の架け替えをしたとしても、自身の中にも課題の山積である。「議会費」の財源確保は言うまでもなく重要とつくづく認識した。

L I N E W O R K Sの導入については、個人的には、特段必要性が現時点で判然とせず、必要性の可否は、上記同様に判断に苦慮する。

東員町議会の現状としては、昨年度の意見交換会後の住民間との関係性の構築や、開催状況等に鑑み、議員側の意識改革が非常に求められると認識しており、「自画自賛、驕り高ぶり・・・」は、反省を常としての議員活動でありたい。又、住民の方々の声を一つでも広く多くをいただくことで、東員町行政へつなげ、「多様性を認め合えるまち」を、より向上へ寄与していきたいと考える。

## 様式1〔申し合わせ事項〕：【委員会、全協：共通様式】

〔氏名：山田由紀子 〕

研修概要、内容、所感

津幡町 八十島議長 小町副議長

田中総務兼危機管理対策室課長 村事務局長 その他職員

内容：事前に送付された資料

＊令和6年度能登半島地震における津幡町の対応等について

＊災害時における議会の対応について

2度の災害における「津幡町」被災状況と議会や議員の対応についての研修となった。

所感：ホームページや資料を自宅で読み込んだ際には、災害の大きさも多少感じ当日を迎えたところであった。淡々と説明を進められる職員の声も加わり、元旦の、あの日の友人とのLINEや会話が蘇り、「怖かった」「家が・・・」等々が走馬灯のように駆け巡り涙腺崩壊した。失礼な状況で申し訳なかった。

職員・議員の方々が憔悴されながらも、前を向き対応されたのかは言うまでもなく、それを踏まえてもなお「反省」との言葉を幾度も使用され、年2回の「議会防災訓練」の充実などへもブラッシュアップの必要性を説かれる議長の態度に感銘を受けた。昨日同様に、LINEWORKSを使用し、訓練にも役立っている状況から、自ずと議会改革にも前向きであり、研修を重ねたことの成果として現状を導いているとの事でもあった。

防災に限らず、日常の「議会と行政の立ち位置」についても、連携が図られている事、自主防災の活動のレベル、共助の強みを捉えている実績報告には、災害を受けてもなお、「町を愛する志の高さ」があった。

県内の水田には、令和の米騒動に対応するべく力を感じ、一方で、被災地住宅やライフラインの復旧には、10年間の目標を掲げている現実もあった。

「横綱大の里関」の大弾幕を掲げる庁舎内外に、変えがたい町民の気持ちがあると推察する。

防災に対する意識については、多くの研修の中でも、「日頃の備えを」の重要性を説かれており、東員町のハザードマップの確認も忘れてはいけないが、津幡町としては、被災をしている状況から、「支援に対する取り組み」も非常に重要となっていた。ふるさと納税による返礼品の対応もあり、有事の際の町財政状況は盤石でなければならず、予測不能な災害は「地震」であり、多くを破壊し生活にダメージを与える事を強く訴えたい。東員町議会として、研修の積み重ねを通して、意味あるものとしてできるよう、住民の皆様方に、「提示・提案」できるものになりたい。

3万7000人の方々が押し寄せた優勝パレードの実績は、自身の心に強く刺さるものとなった。